

## 自然種・種・相同

網谷祐一（東京農業大学）

植原亮氏の『实在論と知識の自然化』（勁草書房、2013年）は、恒常的性質クラスター説（HPC説）に基づく自然種についての实在論を自然種（natural kind）のみならず人工物、さらには知識に適用した点で野心的かつ意義深い書である。本発表では、本書の議論に対するコメントを(a)自然種とそうでないものとの境界について、および(b)生物種（species）について行うとともに、本シンポジウムのもう一つのテーマである相同について簡単な哲学的見取り図を提出したい。

まず自然種とそうでないものとの境界について。植原氏は両者の違いは、自然種ではそれについて導出可能な帰納的一般化の数が無限と言えるほど多いことにあると主張する。本発表では、(i)有限の性質しか持たない自然種が存在してもよいように思える点、また(ii)植原氏によって自然種ではないものの典型例とされている「東京都民」についても、結構な量の性質が見いだされるように見える点から、これは正しくないと論じる。

種(species)について。植原氏は生物種の存在論的地位の問題について、種の個物説（種は個物（individual）であるとする立場）を退け、種は HPC 説が想定するような種類（kind）であると主張する（種類説）。本発表では、この主張を支持する植原氏の議論はいくつかの点で説得的ではなく、種類説が個物説より優れているという根拠は乏しいこと、さらにこの洞察はむしろ種類と個物の区別についての植原氏の説とも整合的であることを主張する。

相同について。相同とは教科書的な定義では、同一の共通祖先から由来したが異なる種に存在する器官や形態である。しかし実際のところ生物学者は相同についていくつか相反する定義を提案している。ここでは、相同の三つの主な定義——分類的相同、変換的（transformational）相同、発生的相同——を説明してから、こうした異なる定義をもたらす生物学的基盤について概観する。それは一言で言うと生物界におけるレベルの違いおよび不統一性（heterogeneity）なのである。